

岩手インターハイ雑感 (2011. 8・17~20)

今回のインターハイでは被災地の方々に大変お世話になりました。寒い日もあり、暑い日もあるコンディション調整においては大変であったと思います。とくに水泳専門部委員長の佐々木靖史委員長は体重が5Kgも減ったそうです。他に県水泳連盟飛び込み委員長の小笠原大輔委員長、高体連飛び込み委員長の稲垣雅宏委員長、競技役員の鈴木実さん等をはじめとする岩手県の役員の方々に衷心よりお礼を言いたいと思います。私自身一本一本よく観ていたのが非常に面白い試合であったように感じました。

一日目、女子高飛び込みの試合です。試合開始早々機械のトラブルやラウンド終了まであと3本というときの中断とかありましたが、天候も時々豪雨になったりして選手が大変であったと思います。試合の中で気にかかったことは試合の最中にかかり練習をしていることはいいものかと感じました。以前にも話を出したのですが、世界の大会の中ではやっているという事でありました。いいパフォーマンスをするにはそうすることもわかりますが、実際試合中のプールでとなるとどうかなと思います。今回の場合練習の場がプールしかなかったのもわかります。どちらでもいいといえばそうですが何か引っかかります。

競技に関して言わせていただくと、二度踏みが多い。という事です。前種目でもありました。「大きいモーションは、大きいパワーを生む」この言葉のように二度踏みという事はつま先が伸びていない状態であり、意識がいていない状態である。踏み切るときの身長をいかに伸ばすか、その伸びた状態から踏切姿勢に素早く入るか、そして踏み切ると大きいパワーとなって宙返りにもつながっていく。

姿勢づくりに苦勞しているなと思った。305は手を振りぬかなければまらない。手を振りぬいて大きなモーションから小さくタックなどに入る。最初のボディアライメントが猫背のような姿勢でそれから手を振るからボディアライメントが崩れた状態からタックに入っている。これが演技に影響する。このような選手は手を振りぬく前に脚を踏み切る必要がある。微妙にタイミングを速くする。飛び出しを速くする。こういう事が405でもみられた。肩が硬い選手。手をあげてセットするのはいいが、腹がでて尻が引けているような状態をつくってしまう。そこから踏み切っても引けた尻なので放物線も上手く合わない。

2日目、男子板。ボードワークがうまい選手。ハードルアプローチで足、つま先に意識がある選手は強い。自信がない、種目に不安がある、このような時はアプローチのつま先が意識してつかえていない。だから、板が合わないとか、板の沈め(踏み込み)が不十分になってしまう。

3日目、女子板。男子と同じようにそういう観点で試合を見た。それと前日までの雨の影響で板のタイミングが微妙にずれることによって失敗につながるという演技が見られた。

4日目、男子高。入水の問題で損をしている選手がいる。たとえば405か107でま

わったから水のチェックの姿勢で顎を出して宙返り事態を止めるという事をしている。したがってオープンパイクに持って行く手の開きが垂線より外側にある。垂線を通り越していないで、入水の手を組む。以前ノースプラッシュになる基本は垂線と自分の体との関係であるといわれている内容を理解している。腰ぐらいの高さのマットに前宙返り(オープン)をして背中で落ちるといふ練習である。自分の演技の最終の入水時がわかっていない。垂線を通り越して初めて演技が完成というところまで我慢しなければならない。

それから、気になったのが逆立ちの姿勢づくりの練習不足である。逆立ちラインを意識してつくるという事が入水につながってくる。

競技運営面では、飛び込み競技中に競泳の練習プールからの話声とか、笑い声とかうるさかったが競技役員の方に素早い対応をしていただいた。審判団も決勝前の紹介では入場行進がそろっていたのがものすごくきれいであった。役員の中には震災の影響があった人も多かったのではないか。大会終了後のミーティングで涙ぐんでいる人もあった。そんな役員の方々にお礼、励ましのことばをかけて盛岡市をあとにした。

2011. 8. 22